フクシマ原発を体験した「双葉地方原発反対同盟の佐藤さん」のお話を聞いて わたしたちの取り組みを見つめる

2011年9月10日　　久保

3月11日フクシマ事故から半年が経ちますが、フクシマ事故による放射能汚染の被害はとどまるところを知らず、次々へと深刻な事態となってきました。

10万人以上に及ぶ避難の長期化、子どもたちをはじめ県民200万人の健康を保障させる問題、放射線管理区域にあたる高線量下で暮らす100万人の生命と暮らしの補償問題、そして、県内の産業や商業・農漁民の壊滅的な打撃と、問題は山積みです。

1　被災の現況と避難生活6ヶ月

大地震、津波被害と併せて原発事故による避難者　71133人（7／5現在）にのぼり、 自主避難者（妻子の県外避難・学校転向）を加えると10万人を超えます。

長期避難生活は、避難当初のハネムーン期（支え励まし助け合う時期）から幻滅期へすすみはじめています。

社会的弱者である病人や老人の死亡が後を絶ちません。病人を置き去りにして逃げざるを得ず、21名の患者を死なせてしまったことや、「原発がなければ」と、記して自殺や、「お墓に避難します」と、言いながら・・・亡くなりました。

（　とりわけ子育て年代にとって、帰れない現実（汚染と雇用）から帰らない決断をする青年）

2　放射能汚染の拡がりと被害の現状
　～大地・空・海・全てに汚染

他県への疎開が拡がり、県外転向する子どもが15，000人余りとなります。

大地・空・海・全てに汚染された事実から自問を繰り返す毎日です。

自治体労働者は、まさに24時間不眠不休、長時間労働・休日出勤が続くのが実態です　学校休業は70校、移転した学校34校、避難を余儀なくされた小中高、特別支援学校の子ども2万人以上、うち約8300人、教職員が1300人以上が避難をしたのでした。

3　原発収束の拠りどころとなる労働者・そして被曝問題

過酷な労働環境の下で必死に働く労働者ですが、国や東京電力が、労働者の扱い方、被曝問題に対しても極めて感情が鈍いことも明らかとなってきました。

事実、事故を収束させるためには、高線量の場所での作業を求めねばならず、相も変わらず高賃金（一日20万）でほっぺだをひっぱだく手法をおこなっていました。作業労働を強いる「使い捨て」です。ひとときの休息をとったある作業員は投げやり的に「酒でも飲まなければやってられっかー」と、つぶやいていました。

放射線量マップの作成と除染、瓦礫の処理問題が大きな課題としてのしかかっています。

拡がる放射能汚染—事実を知り認めることから、

脱原発を基本とする「安心して暮らせる郷土づくり」、知識を深め広めるために学習会、自主的、自発的に線量計を計る日常化、など取り組む課題があります。

そして、日本全国、いや世界のすべての原発の停止、廃炉に向けて、闘いを前進させねばなりません。

「故郷を返せ、隣人を返せ、
　　山を、川を、海を、俺の人生、
　　　子供・孫の将来を返せ、
　　　　　　いのちを返せ」の熱き思いを大切に脱原発、原発に頼らないエネルギー政策の実現に向け、汗を流していきましょう。